新　市　町

関城町（せきじょう）

齊藤町長

1. 沿　革

この町は真壁郡の西部に位し、水戸線下館駅からバスで20分、北は下館市に、南は下妻市に接し、東は小貝川を隔てて明野町に、西は鬼怒川を境に結城市とそれぞれ隣接している。ここからは東に筑波、加波の紫峯と小貝の流れに臨み、西に鬼怒の清流とはるかに日光の連峯を遠望することができる。この地方は昔から鬼怒、小貝川の両流域を中心に農耕地が開け、南北朝時代には関氏の居城である関城跡があつて郡西の中心地を物語つている。昭和31年8月1日には関本町を中心に隣の河内、黒子村が合併し、東西9.9粁、南北6.5粁、面積34.99平方粁、世帯数2,626、人口15,660人(男7,593、女8,067)を有する（昭和32年10月毎月人口調査）新しい町となり、郡内における主食、果実、野菜の主産地として大きく浮び上つてきたが、全町民の融和協調によつて、平和で豊かな町作りのためにまい進しており、将来の発展が大いに期待されている。

2. 産　業

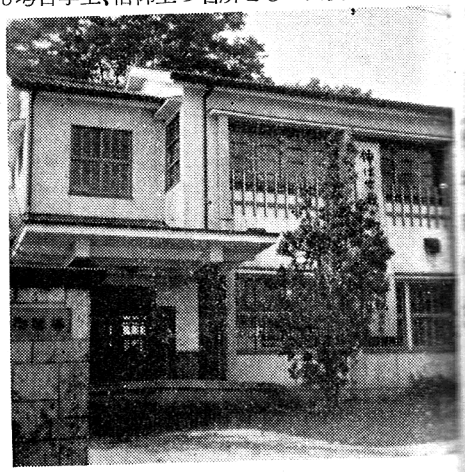
まず農業面を見ると、農家戸数1,946、農家人口12,438人（男5,987、女6,451）、耕地面積2,157町（水田867町普通畑1,039町、樹園地251町）を有している。（昭和32年8月夏期調査）、中でも米24,000石、大麦16,500石小麦6,280石、甘藷107万〆、すいか94万〆、白菜、ホーレン草74万〆、葉たばこ8万kgにのぼり、農家収入の大きな分野を占めている。特に関本梨は本県特産物の一つとして、生産技術、品質改善の促進を行い、東京市場においても大きな声価をあげている。

次に畜産面を見ると、乳牛39頭、役牛944頭、馬230頭めん羊54頭、山羊342頭、豚1,286頭、兎480頭、にわとり10,337羽を有し、次第に有畜農家が多くなつてきた。昭和32年から新農村建設予備地域の指定を受けて、新町の振興計画を推進している由。次に農機具の普及状況を見ると、電動機335台、石油発動機508台、動力耕うん機11台、〃脱穀機800台、足踏脱穀機492台、動力籾すり機126台、〃製粉機275台、噴霧機529台、動力製縄機108台足踏製縄機886台、畜力カルチベーター288台、畜力水田中耕除草機94台、畜力砕土機273台、畑用播種機57台、畜力畑用すき549台、〃水田用すき782台に達し、次第に農業の機械化が進んでいる。町としても昭和29年度から農地の交換分合を実施し、農地の集団化と整備事業を行つているので、動畜力の導入と相まつて農業生産力の増強が期待されている。またこの地方は昔から養蚕業も盛んで、県立蚕業試験場、茨城蚕種協同組合などが設置されており、養蚕戸数は305戸、桑園163町、年間収繭量17,000〆に達している。次に商工業面では農村地帯が多いので特に見るべきものはないが、工場数は76、従業者数211名、年間製造出荷額1億5,000万円で（昭和31年12月工業調査）、なかでも菓子類と桐材製品が非常に多い。商店は461、年間総売上高は1億7,000万円と推定される（昭和31年7月商業調査）

3. 教育文化

ここには小学校3、中学校が3あつて、小学児童数[illegible]325名（男1,209、女1,116）、中学校生徒数1,037名（[illegible]511、女526）を有している。町としても町村合併とと[illegible]に小、中学校の統合整備計画を進めており、また独立[illegible]民館を設置して、青年、婦人会や農事研究団体、社会[illegible]育団体の統廃合も行い活発な運動を促進して生活改善[illegible]営農改善のために大きな効果を収めている。また町民[illegible]保健、医療の向上を計るため、国民健康保険組合の結[illegible]準備を進め、本年12月に発足の運びとなる由。

名所旧蹟としては、まず茨城百暑に指定された関城[illegible]があり、その築城は古代後期らしいが建武中興南北[illegible]乱の際城主関宗祐が延元3年9月忠臣北畠親房を迎え[illegible]親房が神皇正統記を修正し、興国4年の落城まで奮戦[illegible]たところで、歴史上、軍事上の中心地だつた。また東[illegible]子には、平城天皇の大同2年名僧慈覚大師の創建と[illegible]れる天台宗屈指の名刹東叡山千妙寺があるが、昔から[illegible]羽八州10カ国の総本山となつている由。またここに[illegible]堂、五重の塔をはじめ、樹令6,700年を数えるという[illegible]がある。また本町の北部船玉の古墳跡および梶内の[illegible]音も考古学上、信仰上の名所として四隣にきこえて[illegible]



齋藤町長の抱負

1. 合併後1年余を経過したので、すみやかに新[illegible]計画の調整を行い、住民福祉の増進を図り、町の[illegible]な発展を期する。
2. 教育の振興を図るために小、中学校の整備拡[illegible]うとともに公民館活動を推進する。
3. 取り残された畑地改良（農地集団化、畑地[illegible]い）を行い、適地適産主義を取り上げる。
4. 納税組合の育成強化を計り、町財政の確立に[illegible]とともに計画的支出を行い、予算の効率的使用[illegible]る。
5. 職員の研修を行い、素質の向上を計り、一般[illegible]のサービスと事務能率の向上を期する。

4. 財　政

昭和32年度一般会計歳入歳出予算

歳入	町税	地方交付税	公営企業及び財産収入	分担金及び負担金	使用料及び手数料	国庫支出金	県支出金	寄付金	繰入金	繰越金	雑収入	町債	合[illegible]
	21,935,000	11,100,000	10,000	128,000	259,000	269,000	978,000	838,000	2,000	1,500,000	55,000	3,000,000	40,[illegible]

歳出	議会費	役場費	消防費	土木費	教育費	社会及び労働施設費	保健衛生費	産業経済費	財産費	統計調査費	選挙費	公債費	諸支出金	予備費	合[illegible]
	1,185,000	12,933,000	2,768,000	1,667,000	11,584,000	353,000	96,000	3,740,000	179,000	135,000	342,000	790,000	2,938,000	500,000	40,[illegible]

の　横　顔

谷田部町

飯泉町長

1. 沿　革

この町は常磐線土浦駅からバスで約40分、東は土浦市および桜村、西は水海道市および谷和原村、南は茎崎、伊奈村、北は豊里町と大穂町にそれぞれ隣接しており、筑波郡における産業、経済、交通、教育文化の中心地となつている。この地方は大昔筑波国といわれたが、その後八部郷や名島郷に属し、栗原氏岡見氏、多賀谷氏、細川氏等の所領地や幕府の直轄地、旗本の采地で占められていたが、明治4年の廃藩置県の際は若森県から新治県へと、また同8年[illegible]に茨城県に編入されたのである。昭和30年3月には谷田部町を中心に隣の小野川、葛城、島名村と真瀬村の一部が合併して、今や面積80.1平方粁、人口21,984人（男10,899、女11,085）世帯数3,958を有する（昭和32年[illegible]月人口調査）新町が誕生し、平和で明るい町作りのために全町民が立上り今後の発展が嘱望されている。

2. 産　業

まず農業面を見ると、農家戸数は3,040戸で全戸数の[illegible]割を占め、農家人口は17,526人（男8,644、女8,882）[illegible]地面積3,224町（田1,181町、普通畑1,874町、樹園地[illegible]町）、山林2,600町を有している。（昭和32年8月夏[illegible]調査）おもな農産物は米3万石、大麦21,000石、小麦[illegible]石、白菜50万〆をはじめ、すいか4,500万〆（作[illegible]面積160町）落花生400町などである。果樹類は最近く[illegible]をはじめ桃、葡萄の作付が約80町にのぼり将来の生産[illegible]待される。養蚕業も戦前から盛んで、養蚕戸数576[illegible]、年間収繭量29,000〆に達している。次に畜産面を見[illegible]と、土浦地方が集約酪農地域に指定されてから、本町[illegible]乳牛の導入に力を注ぎ、31年には優良種乳牛100頭、[illegible]年には神奈川県から種豚100頭を導入貸付して畜産振[illegible]を図つている。そして飼養頭数は牛乳130頭役牛1,335[illegible]、馬109頭、めん羊121頭、山羊287頭、豚1,665頭、兎[illegible]頭、にわとり20,444羽にのぼり、特に山林原野が多[illegible]ので飼料資源に恵まれ、「農業経営の合理化は畜産振[illegible]から」のモツトーのもとに全力を傾注しているので有[illegible]農家が次第に増加してきた。（昭和32年2月冬期調査）

次に商業面を見ると、法人および常用労働者を有る商[illegible]16、従業者61名、年間商品販売額9,203万円、常用[illegible]者のいない個人商店273、従業者402名、6月中月間[illegible]額1,870万円でほとんど小規模な食料品、衣服身廻[illegible]品雑貨の小売店である。（昭和31年7月商業調査）

また工業面を見ると、工場数26、従業者83名、年間製造出荷額5,835万円で特に見るべきものはない。（昭和31年12月工業調査）

3. 教育文化

ここには小学校6、中学校4、高校1あつて、小学児童2,986名（男1,584、女1,402）、中学生徒1,445名（男776、女672）、高校生徒全日564名（男372、女192）、高校定時生26名である。合併後3年を経過したので、いよいよ学校施設の拡充強化と教育内容の充実を図るために学校の適正配置を考究中である。公民館は本年条例を改正して統合強化を図り、本館1、分館5を中心に青年団、婦人会の提けいを緊密にして社会教育の普及と生活改善運動の徹底に努力し、立派な実績を収めている。

この町は古くから細川候の城下町として非常に栄えたところで、中心に五角堂の伊賀七時計がある。五角堂は一辺4.6米の正五角形の建物で当飯塚家21代正一氏の祖16代伊賀七が宝暦12年から天保7年頃に設計建立したものと伝えられる。この時計は木製で鏡や太鼓を鳴らして町民に時間を知らせ、また自動的に門の扉を開閉したといわれたが、現物は長い間に解体され、五角堂の倉庫に攻置されていた。しかし小野川気象台の和時計研究家田村竹男氏によつて最近復元し、県文化財に申請中である由。またここには館野気象台があり、戦時中は海軍航空隊の所在地として全国に知られていた。

飯泉町長の抱負

1. 土地条件の整備を図ること。まず小貝、東、西谷田川の改修を計るとともに霞ケ浦、小貝川を利用した水利、排水事業の整備によつて1,800町にのぼる湿田の乾田化および畑地かんがいの実現を促進する。また耕地整理、農地の集団化事業を推進して農業の基礎条件を整備したい。
2. 農業経営の高度化を図ること。新農村建設事業を推進して近郊園芸地帯、草資源に恵まれた東京市乳圏の特質を十分に生かし、適地、適作、適畜による経営の高度化を図り、また広大な平地林に対してはくり、その他特用樹を導入し、混農牧林経営の強化を促進する。
3. 交通機関を整備すること。東京～谷田部～筑波間の鉄道建設の夢を実現したい。
4. 商工業の振興を計ること。土浦、水海道市にはさまれて苦悩する商工業の振興計画を研究するとともに、工場誘致を勧奨したい。
5. 新町建設計画を推進すること。まず学校の統合、消防機構の改革、通信施設の整備、農業団体の統合強化国民健康保険組合の結成などを急速に推進したい。

4. 財　政

昭和32年度一般会計歳入歳出予算（昭和32年11月20日現在）　（単位円）

歳入	町税	地方交付税	公営企業及び財産収入	使用料及び手数料	国庫支出金	県支出金	寄付金	繰入金	繰越金	雑収入	町債	合計
	36,615,300	21,773,000	4,000	368,200	1,387,080	2,073,320	717,000	2,000	516,935	533,200	2,001,008	65,991,035

歳出	議会費	役場費	警察消防費	土木費	教育費	社会及び労働施設費	保健衛生費	産業経済費	財産費	統計調査費	選挙費	公債費	諸支出金	予備費	合計
	2,511,800	17,224,460	8,088,670	7,032,550	12,721,390	1,685,870	1,367,140	7,931,430	3,000	353,560	440,200	1,500,000	4,830,965	300,000	69,991,035